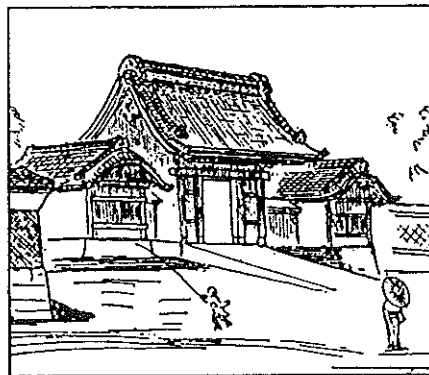


ベルツの日記

(上)

トク・ベルツ編

菅沼竜太郎訳



明治9年エルウィン・ベルツ(1849-1913)は東大医学部の「お雇い教師」として招かれ、以来いく度かの帰国をはさんで滞日29年におよんだ。

この日記は原題を「黎明期日本における一ドイツ人医師の生活」といい、かれが日本人妻ハナとの間にもうけた長男トクの編になるもの。上巻には来日直前から日露開戦前夜までの記事をおさめる。(全2冊)



青 426-1
岩波文庫

十一月二十二日(東京)

今日、燃えるような秋の装いにかがやく植物園で、自分の同僚や以前の学生たちが、日本在留二十五周年を記念する盛大な祝典を催してくれた。

来賓——文部大臣、大学総長、ドイツ公使館の全員。まず緒方正規教授が祝辞を述べて、自分の横顔入りの大きな金のメダルと、もと自分の教えた人たちの写真二百葉をはった四冊の大アルバムを贈られた。次に高橋順太郎教授が祝辞を、それから菊池文相、そのあとで自分があいさつを述べた。出席したドイツ人の言によると、自分の演説は傑作だったそうだ。とにかく、この演説は好意的のもので、将来に対する非常にまじめな忠告を含んでいた。自分が最も強調した点は、日本人が自身で産み出し得るようになるためには、科学の精神をわが物とせねばならないということであった。

演説の内容は次のとおり——

閣下、来賓ならびに親愛なる同僚諸君！

諸君がわたくしのため設けて下さったこの豪華な祝典、そして光栄にもわたくしが拝受したこの素晴らしい記念メダルや、後の日までも日本の知友の面影を記憶に呼び起こす写真を集めた、この四冊の立派なアルバムによって表明されたこの祝典に対して、わたくしは心からお礼を申し上げます。

全くのところ、これはまれに見る祝典であります、事実、外人が日本で同一の公共機関の所属員として二十五周年記念をお祝いするようなことは、これが最初であって、おそらくまた最後のことでしょう。

これは、いわば帝国大学とわたくしの銀婚式のお祝いですが、普通の場合との大きな相違は、ますます固く結びつくのではなく、やがて永久に別れることになる点であります。

しかしながらこれは、医学部にとっては同時に停年の宣言を意味するものでもあります。三十年にわたって外人たちが医学校で働いたのち、来年からは日本人が単独でこの仕事を続けるのであります。これは極めて当然の希望であり、極めて当然の措置であります。わたくし自身といましては、この時期が速かに来なければならぬことを、すでに六年前に指摘いたしましたような次第で、当時、大学におけるわたくしの仕事を軽減して、日本人の同僚諸氏にだんだんとわたくしの後を継ぐ機会を提供するよう申し出たのでした。日本人同僚諸氏にその能力のあることを、わたくしはみじんも疑わないものであります。

もっとも、光のあるところには、影もまたあるもので、日本の真の友、温い友としてわたくしは、この影の面をも黙って見過ごすことは許されないと 생각합니다。しかしこれに触れるには、このおめでたい席は適当な場所ではありません。

そうはいうものの、わたくしは一つの点を指摘したいと思います——というのは、大学の発展と将来の繁栄がこの点と最も密接に結びついているからであり、また科学の指導者諸氏のほかに、

特に将来科学を背負ってたつ人々、すなわち現在の学生諸君がかくも多数見えているこのような会合でお話をする機会が二度とあるかどうか、わたくしにはわからないからでもあります。

すなわち、わたくしの見るところでは、西洋の科学の起源と本質に関して日本では、しばしば間違つた見解が行われているように思われるのであります。人々はこの科学を、年にこれこれだけの仕事をする機械であり、どこか他の場所へたやすく運んで、そこで仕事をさすことのできる機械であると考えています。これは誤りです。西洋の科学の世界は決して機械ではなく、一つの有機体でありまして、その成長には他のすべての有機体と同様に一定の気候、一定の大気が必要なのであります。

しかしながら、地球の大気が無限の時間の結果であるように、西洋の精神的気候もまた、自然の探求、世界のなぞの究明を目指して幾多の傑出した人々が数千年にわたって努力した結果であります。それは苦難の道であり、汗——それも高潔な人々がおびたましい汗で示した道であり、血を流しあるいは身を焼かれて示した道であります。それは精神の大道であり、この道の発端にはピタゴラス、アリストテレス、ヒポクラテス、アルキメデスの名前が見られますし、この道の一番新しい目標の石にはファラデー、ダーウイン、ヘルムホルツ、フィルヒョウ、パストール、レントゲンの名前がしるされています。これこそヨーロッパ人が到るところで、世界の果てまでも身につけている精神なのであります。

諸君！ 諸君もまたここ三十年の間にこの精神の所有者を多数、その仲間を持たれたのであります。西洋各国は諸君に教師を送ったのでありますが、これらの教師は熱心にこの精神を日本に植えつけ、これを日本国民自身のものたらしめようとしたのであります。しかし、かれらの使命はしばしば誤解されました。もともとかれらは科学の樹を育てる人たるべきであり、またそうならうと思っていたのに、かれらは科学の果実を切り売りする人として取扱われたのでした。かれらは種をまき、その種から日本で科学の樹がひとりでに生えて大きくなれるようにしようとしたのであって、その樹たるや、正しく育てられた場合、絶えず新しい、しかもますます美しい実を結ぶものであるにもかかわらず、日本では今の科学の「成果」のみをかれらから受取ろうとしたのであります。この最新の成果をかれらから引継ぐだけで満足し、この成果をもたらした精神を学ぼうとはしないのです。

これら外人教師の大部分は、尊敬すべき研究精神の所有者でありました——でなければ、かれらが本国に帰つた後、現在占めているような学術上の地位を与えられるはずがありません。その地位は、かれらが日本で行なった学術上の研究に基いて与えられたものであります。日本の国民経済に関する最良書は、前東大教授カール・ラートゲンの書いたものであり、日本の農業事情および農民階級の状態に関する最良書は、前東大教授マックス・フェスカが書いています。また日本全般に関する最良書は、ドイツのボン大学教授ラインが著わしています。これは決してわ

たくし個人だけの意見ではなく、日本の事情に関する権威として万人に認められている人物、すなわちイギリスの前駐清公使アーネスト・サトー卿の説なのであります。これらの書物によって日本人は、自国と自国民が公平な観察者の眼に、どのように映じているかを知ることができるのであります。こちらでは、これらの本はほとんど全く注目されていません。

諸君！ 今や日本の経済界では、外国資本の導入が盛んに問題になっています。ところで、さきに西洋から豊富な精神的資本が諸君の意のままに提供されていたのですから、日本ではこの資本によって巨利をすら博する機会に恵まれていたにもかかわらず、実際にはこの資本の利子を食いつぶすだけで満足していたのでした。

このようなおくれを取りもどすのは、今が潮時です。やがては、ごくわずかの外人教師しか当地に居なくなるでしょう。わたくしが諸君にお勧めするのは、これらの外人教師にもっと自由を与え、活動の機会を与えることであり、また教師としての仕事以外でかれらとの接触を求めることです。それを実行した結果、諸君が後悔されるようなことはないでしょう。またそうすることにより諸君は、講堂では(たとえヨーロッパの講堂でも)学び得ないが、ただ学者自身との交際においてのみ知り得る精神について、もっと多くのことがおわかりになるでしょう。またそうすることにより、講堂で講義される事からの出所である精神の仕事場をのぞきこむことができるのです。この精神をわが物とすることは容易ではありません、それはとても手のかかる存在で、たい

ていはそれに一生を費すのであります。

諸君！ このようなことを申しあげるのは、決してごご好きの性質から出たものではなく、大学の光輝ある将来をせつに祈る気持から出たものであります。わたくしが大学の幸・不幸に深い関心をもつところから申し述べたような次第であることを信じていただきたい——この大学こそは、現にわたくしが一生の働き盛りの年月を捧げたところであり、今後たとえ大洋・大陸で隔てられても、常にこれと固く結ばれているという気持をうしなうことはないと思ふのであります。

十一月二十五日(東京)

当地に「月曜会」といって、公使館関係と日本上流社会の婦人連が組織している会がある。この会のため、今日、鍋島侯の家で、婦女子の服装改革に関して一席弁じた。十二歳までの子供には、単純に洋服を推奨したが、大人の場合は、事情がとてもう簡単ではない。——しかし、この講演の効果に期待をかけて、とやかく空想することはしない。日本の上流婦人には、およそ決断力が欠けているからだ。かの女たちは、あとで自分にいった「まあ、なんとおもしろうございましたこと！」と。それだけで、さしあたり、事はおしまいだ。